

ある療養所に収容され強制隔離をしていました。「家族と一緒に暮らすことや実名を名乗ることができない」「子孫全滅として女性は強制不妊手術や人工中絶を受けさせられる」など自由に生きることの権利（人権）を剥奪され、根強く残る差別や偏見に社会的に孤立し精神的苦痛を抱き続けていました。誤った認識から生まれた世間からの厳しい差別や偏見だけでなく、過酷な環境下での監禁生活は、私の想像を遥かに超えるものでした。そして現在も社会復帰できず生涯をこの地で過ごされている悲痛な思いから、屈辱的な社会問題であることを再認識しました。

また、栗生楽泉園には全国で唯一の「重監房（特別病室）」があり、再現重監房で収監を模擬体験しました。逃亡できない造りの小さな窓から薄つすらと陽が差し込む程度で日中も暗く、マイナス二〇℃にもなる冬季も薄い布団だけ、十分な飲食も与えられないなど、人間としての尊厳や生存権の一つである「衣食住」が欠如した劣悪で耐え難い環境に恐怖を感じました。更に、研修で訪れた日中も外はマイナス七℃と極寒で、防寒対策をしながらも現地の厳しい寒さを肌で感じ、悲惨な環境の中で重監房に収容されていた過酷さを痛感しました。

今回の研修を通して、私達の誤った認識で

誰しも意図せずに偏見差別をする側になり得る可能性はあり、ハンセン病のような過ちを二度と繰り返さないことが大切であると学びました。様々な物事に対して個人の主観や思い込みだけで憶測を立てることは、差別や偏見に繋がる可能性があります。まずは正しい知識を持つことが大切であることを改めて学びました。

◆前橋協立病院職員 匿名

偏見差別にさらされて、今を生きる私が
ハンセン病問題から学んだこと

一月二二日（木）、群馬民医連主催のハンセン病ファイルドワークに参加し、草津町にある栗生楽泉園に伺いました。この日はハンセン病について学ぶだけでなく、医療従事者として何が大切かを考える機会になりました。

ハンセン病を引き起こす「らい菌」は感染力が弱く、感染しても発病するのは非常に稀です。しかし、発生当初（編集者注）政府による対策が執られ始めた頃は原因や治療法がわからず、癩予防法や無らい県運動による隔離政策がとられました。症状の一つとして外見に特徴が出ることや、富国強兵政策に相反する存在との認識が差別意識を助長し、医療従事者や地域住民が患者の存在を密告して強制的

に療養所へ送ろうとする動きにまで発展しました。治療法の確立後も隔離政策は続き、長期隔離の不要な病氣と明らかになってもなお、患者や家族は偏見と差別に苦しみました。

最も耐え難かったのは、重監房について学ぶ時間です。重監房は栗生楽泉園のみに設置された懲罰房で、特に反抗的とされた患者が罪状の真偽や妥当性を考慮されないまま収監され、そのうち二三人が亡くなりました。実寸大で再現された房の中に入り分厚い扉を閉めると、足元の小窓から光が意味をなさないほどの暗さと自分ではどうにも逃げられない無力感に包まれ。あまりに恐ろしくて息が詰まりました。屋外ではダウンジャケットを羽織ってもなお震えるほどの寒さにもかかわらず、房の中には「せんべい布団」があるのみ。防寒できず、布団が床に凍り付いた状態で亡くなった療友を世話役の患者が引き取ったとお聞きし、布団に触れた時の布地の薄さと冷たさに身につまされる思いになりました。

らい予防法が廃止された現在も療養所で暮らすざるを得ない方がおり、ハンセン病問題は決して過去の出来事ではありません。医療機関で働くものとして、病氣や障害への差別意識が本当に無いか、それは社会情勢によって揺らがないか、時折立ち止まって自分に問いかける必要があると感じました。

前号で紹介しました重監房資料館主催の「語り部の会」がこれまで二回開催されました。それぞれの会の報告です。

◆語り部の会に参加

西沢美千代

一月二四日、重監房資料館での「語り部の会」に参加させていただき、直接Aさんのお話を聞くことが出来ました。お元氣そうでもとも穏やかな雰囲気の方で、園での現在の生活を伺い知ることが出来、ホッと思いました。

小学校時代に発症し、楽泉園に入所する事に。しかし普通学校が良いのでは？との判断で再び地元の学校に戻り、周囲から「今迄何処に行っていたんだい？」との質問に、「草津の山の方」と答えていたそう。子ども心にも複雑な思いだったのではなからうか：

いじめられる事は余りなかったそうだが、大人になり病氣のことを隠したまま大手の会社に入社する事に。次第に頼られる存在になりながらも「バレちゃったかな？」と思う事があり、生涯病氣のことは心から離れる事はなかったそうです。

しかし彼の欲しいカメラを手に入れる迄の段階・過程はとても面白く、すぐにその欲しいカメラではなく最初は安い品を買い、それを

質屋に入れて軍資金を増やし今度はその上の物を手に入れ、それを何回か繰り返し最後に本当に欲しかった物を手に入れたそうです。このようなやり方は実直そのもの且つ賢明で、私も見習うべき生き方そのものでした。だからこそ、現在もAさんから伝わる温かなお人柄にこちら迄豊かな気持ちを持つ事が出来、本当にお会い出来嬉しかったです。でもその頃はカメラ自体がもっと進化した物(デジカメの登場の頃か)になっていたと、笑っていました。

一方で「辛い時はなかったですか？」という参加者からの質問の際、悲しそうなお顔をされていたので、「事実を伝える事と、思い出したくないとの思い」が今も交錯しているのかな：と、勝手に思う自分もいました。

帰りに松浦信司祭の草津聖バルナバ教会に立ち寄らせていただき、司祭がオルガンを弾いて下さいました。その音色を聴きながら、楽泉園の方々はどんな祈りを捧げていたのかな～と思いを馳せながら帰路に就きました。

◆重監房資料館 語り部の会報告

大島一弘

二月二八日、重監房資料館主催による、栗生楽泉園入所者のM・Tさんの語りを聞く会

が開催されました。場所は、重監房資料館のレクチャー室で行われました。

Tさんは、人前で話すのはあまり得意ではないということ、あらかじめ原稿を用意して読み上げる形で行われました。この会の趣旨である、ハンセン病問題を風化させない、人権問題の啓発という要請を受け入れてご自身の歩みをお話くださることに感謝します。

Tさんがつけたタイトルは、「悔いのない人生を生きて」というものです。

Tさんは、昭和一六年生まれ。家族との別れは、一〇歳の時だそうです。お父さんも楽泉園に入所していました。一度社会復帰をして、実家にいた時、一緒にお風呂に入っていて、お尻に斑紋を見つけて、つねつても何しても痛くない。子どもだから、それを学校に行っても我慢していたそうです。斑紋は見えないところだから、そのまま学校に通っていました。

八月の一日に楽泉園に来た。夏休みのうちに入所。すでに再入所していたお父さんと一緒に暮らしました。入所後は、園内の望学園で勉強をしました。中学を卒業後、園内の患者作業もしました。車の運転がたくて運転手になりました。園の中では、免許がいらなしナンバーもない車だから。そのうちに、正式に免許を取って、町に働きに行くようになり

ます。免許は、大型から大型特殊まで取ったそうです。それほど車が好きだったのです。

結婚のために軽快退所ということで、社会復帰をしました。昭和四五年二九歳で結婚。生活は、子ども二人生まれて、「T重機」という会社も立ちあげて順風満帆でした。

しかし、昭和六一年病気が騒いで再入所しなければならなくなりました。その結果、離婚という結果に。こんなことがあったと言います。奥さんから、「あんたは、子どもが結婚する時に相手の家族と付き合わなければならぬが、付き合っていないか」と。「俺は、できないと返事をした」と。Tさんの語りは、簡単ですが以上のような内容です。

最後に、質疑応答があり、何でもいいから答えられる範囲で答えます、とのことでも私も質問しました。内容は、家族訴訟での補償金の件です。妹さんは、請求をしたそうですが、権利のある人でも身内には、内緒にしているので請求していない、とのこと。まとまったお金が入ると、いちいち家族に説明するのが大変だからとのこと。そんな大金ではないのですが、やはり躊躇してしまうのでしょうか。

Tさんの語りの詳しくは、二〇〇九年発行の『栗生楽泉園入所者証言集』の下巻に収められています。是非一読を。『証言集』は、群馬県内のすべての公立図書館に寄贈されています。

ます。また、県内の公立高校にも寄贈されました。

◎このほか重監房資料館では七月以降次の日程で、楽泉園入所者による「語り部の会」を計画されています。

● 七月一日(土)一〇時三〇分より

● 八月二九日(土)一〇時三〇分より

お申し込みは重監房資料館まで。

重監房資料館ホームページアドレス

<https://www.nhdm.jp/sjpm/>

■舗装工事完了



重監房資料館へ入る道がこれまで舗装されないガタガタ道で、過去に窪みにタイヤがはまって動けなくなるといったトラブルも発生していました。昨年度、楽泉園自治会から

も要望が出され、土地の所有権等の整理を経て、昨年一二月から今年

の四月末にかけて工事が行われ、舗装が完了しました。



■事務局員として主にホームページを担当していました八木登さんが、本年一月にご逝去されました。二人より追悼の言葉を掲載し、「冥福をお祈りいたします。」

八木登さんのご逝去にあたり 心からお別れの言葉を送ります。

永い間、ともに生きる会の役員として活躍されてきた八木登さんが令和八年一月一九日、七十二歳にて生涯を閉じました。八木さんは「ともに生きる会」の機関紙「人間」の編集・印刷・発送作業、ホームページの編集・管理を行ってくださいました。ホームページはハンセン病問題を全国に発信し、啓発活動に今でも貴重な役割を果たしています。

八木さんはまた「書」にも優れ、「ともに生きる会」のイベントでは筆をとってくれました。最近では体調がすぐれないと聞いていましたが、七十二歳でまだまだこれからの活躍を期待していましたが、本当に残念です。「ともに生きる会」の事務局一同、ハンセン病問題の残された課題の解決のため八木さんの思いにこたえて頑張ります。

どうか安らかにお休みください。

事務局長 大川正治

追悼 八木登さん

小山時子

「よく、来てくれたね。事務局員になってくれるんだって。本当かい。」と、自室のベッドで目だけこちらに向けて、笑顔で八木登さんをじつと見ていた筈雄二さん。八木さんは、「頑張ります。」と筈雄二さんの手を両手で握っていました。二〇一四年一月、わたしはどうしても八木さんを筈さんに会わせたくて、体調が危ぶまれていた筈雄二さんに面会を申し出たのでした。

最初八木さんは、静まり返った雪の樂泉園に驚いていたようでした。劔さんととの面会の際は、緊張していたのか真剣な面持ちで劔雄二さんとわたしの会話を聞いていましたが、柔和な劔さんを前に、ご自身の思いを語っていた姿を今でも思い出します。その日の夜、劔雄二さんから「マフラーを忘れなかったかい。」と電話をいただきました。わたしは思わず（大丈夫なの）と心配しつつも、劔さんの落ち着いた声に安堵してしまいました。まさかその会話が劔雄二さんとの最後の会話になろうとは思ひも寄りませんでした。

その四か月後の五月一日、笹雄二さんは亡くなりました。一度限りの面会でしたが、八木さんは笹さんの思いに寄り添い、事務局

員としてホームページを新たに開設して担当していただきました。事務局員になった当初二年間ほどは、ともに生きる会の機関紙「人間」の編集と発送作業等に尽力してくださいました。皆様から届いた「人間」の原稿の印刷はわたしが、折り機を使った二つ折り作業は八木さんと、二人で分担して印刷を行いました。特に折り機は調子が悪くなることが多く、何度もやり直したり再度印刷をしたりと大変でした。印刷後の発送作業は、分担して持ち帰り丸々二日間かけて六五〇部を仕上げ、およそ四五〇部を郵送。今思い出しても、（よくやったな）と思うほどです。

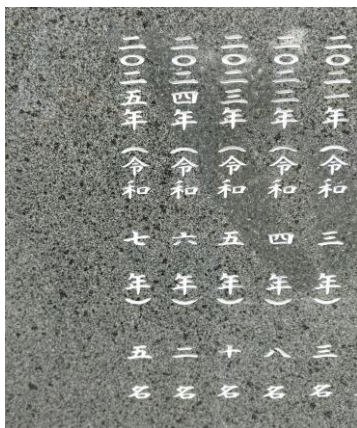
私的なことですが、わたしは八木さんと同級生で、八木さんは当初から同窓会の幹事として、案内状発送や同窓会当日の取りまとめ、写真発送等、多岐に亘って世話をしてくださいました。ジャズが大好きで歴史にも精通していた八木さん。特に中世の山城に関して高い見識があり、ご自身の見解をまとめ上げて発表していました。さらにコーラスや俳句、書道でも活躍していたほど、多岐に亘り才能を発揮していただけに、突然の訃報に（信じられないよ……どうして……まだ早すぎでしょ……）という言葉が、何度もグルグルと反復、同時に八木さんとの思い出が蘇ってきて、今も寂しさが消えません。

ご苦労様でした 八木さん
ありがとう 八木さん

■「人権の碑」に死没者数刻銘

昨年、栗生楽泉園入所者の死者数は五名で
 した。六月四
 日にその人数
 を「人権の
 碑」裏面に、
 地元吉田石
 材様により
 刻銘がされ
 ました

二〇二二年（令和三年）	三名
二〇二三年（令和四年）	八名
二〇二四年（令和五年）	十名
二〇二五年（令和六年）	二名
二〇二五年（令和七年）	五名



■ 寄付の御礼

寄付をいただいた方々のご支援に感謝し、お名前をご紹介します。

（二〇二五年二月～二〇二六年五月末）

アイウエオ順、敬称略）

HP上では、寄付者の個人名は伏せさせていただきます